
中世ヨーロッパの皮革 3. 革製品

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

北ヨーロッパに住み牧畜と農耕を行っていたゲルマン民族は紀元前1世紀頃にはローマ帝国の周辺にまで移動し、4世紀末にはローマ帝国内に大移動した。この時代のゲルマン民族の皮革製造技術はすでに高く、細工や装飾のある革靴が使用されていた。8世紀にはカール大帝(742～814在位)が支配領域を北はバルト海に注ぐオーデル川の中流域から、東はドナウ中流域、南はイタリアおよびピレネー南麓エプロ川流域に達するフランク王国を築いた。11世紀末から200年にわたって続いた、聖地エルサレムを取り戻すためのキリスト教徒による十字軍の大遠征や中世末期のイギリスとフランスの百年戦争(1330～1453)、その他の戦争において、大部隊の軍隊が移動した。軍隊の装備品ばかりでなく、手袋や靴、ベルト等の日用品にも広く皮革製品が使用された。

2. 軍装備品

カール大帝の軍隊は装甲騎兵隊、近衛隊と聖界の封臣軍、歩兵隊、輜重隊しちゆうからなる大部隊であり、その装備すなわち馬具や武器、甲冑、履物ばかりでなく運搬車両にも多量の皮革を使用した。カール大帝が発したと言われる領地の管理運営を規定した勅令(カピトゥラリア)には、運搬車両を革で覆い、食料や器具、武器を保護すること

や獣皮で作られた皮袋のことが記述されている¹⁾。毎年、新年に王国の財産目録が作成され、その中には革、皮、毛皮および角が含まれていた。また液体の容器として木製の桶の代わりに革袋を使用することを禁じていたが、これは革が貴重品であることを示している。アインハルト(770頃～840)の「カール大帝伝」では、カール大帝が冬にはカワウソやテンの皮で作った胴鎧を身につけ、肩と胸を庇ったと記されている。また遺品の調度品として、革製品や荷鞍がある。

ギリシャやローマの甲冑は革製または青銅製であり、胴鎧の下端には革製の草摺くさずりを垂らして腰や大腿部を保護した。また金属や革の小札こざねを重ねて紐で綴った鎧もあった。なお中国の最古の鎧は殷代の革製のものであり、戦国時代までは革製の甲冑が主流であった。秦の始皇帝陵の兵馬俑の鎧素材は確認できないが、軽量で機能が優れているように見えたので(2009.3筆者検分)、革も使用されていたと考えられる。なお日本における甲冑は「続日本紀」によれば、8世紀に勅命で鉄製から革製しよくにほんぎに変わった。

ヨーロッパの中世初期には、裕仕立ての布又は革で頭部と肩を覆う軍衣が作られ、後にその表面に金属製の小札や環を縫い付けた。12～14世紀の頃は鎖帷子くさりかたびら(ブリュネ)が一般的であった。これは亜麻布か革を二

重ないし三重に重ね合わせた膝丈上着の上に鉄の環を並列的に並べて縫い付けてあり、その後、環を重なり合わせ強度を増大させた(図1)²⁾。小札鎧は革製胴着の上に小さな鉄の板をいくつも固定しており、内側を鉄条で強化したものもあった。一般兵士の多くは実践での重装備の動きにくさを嫌ってプリカンティーンと称する二重の革または織物の間に薄い鋼板を挟んだ胴着を身につけていた。14世紀中頃のドイツ騎兵の装束は鎖帷子とその上に羽織る陣羽織が短くなり、その腰丈陣羽織を「レントナー」と呼んだ。素材は布ではなく、革が普通であった。革製の脚衣と膝当ても身につけた。鎧の上にオコジョの毛皮マントをまとう騎士もいた。鉄兜の下には毛氈製ないし革製の縁無し帽を被った。

騎士のガントレットという籠手は革または厚地の手袋を台として、手の甲や指、手首を鉄製の板やレーム(鱗状のもの)で覆ってあったが、後には全体が軽い革製のものが主流となった。100年戦争に勇名を馳せた黒太子(1330~76 イギリスのエドワード三世の息子)のものはセーム革であった(図2)³⁾。



図1 小札鎧(左)と鎖帷子鎧(右)の騎士(800~1300年)

7世紀頃のサットン・フー(イギリス南東部のウッドブリッジ付近)の船葬墓にはバイキング時代の板を皮で覆った盾が発見されている³⁾。盾は初め木枠や柳の枝を編んだ物に皮革を貼った物であった。11世紀以降は、革を張り鉄の金具を打ちつけた円形の盾に代わって、金属製の縦長の形になった。その内側に握り用の革環が取り付けられてあった。オッフエンバッハのドイツ皮革博物館には、革張りの豪華な盾(1540年頃の装飾用、1600年頃の領主司教用)が保存されている^{4)、5)}。その他にも、槍や剣の革の柄(17世紀初期)や野豚の皮で覆った矢筒(15世紀)が保存されている。このことは実戦用の革製武具が以前に使用されていたことを意味する。

1050年頃のバイエルン地方の修道士が書いた騎士物語「ルオドリープ」には、革製の靴が記述されている。これは後の12、3世紀の頃の宮廷叙事詩や騎士物語の先駆となっている。ブルフィンチの「中世騎士物語」(1858年)には、斑入り(cordwalコルドバ革)の半長靴や革の短靴並びに最上のコルドバ革に鍍金の留め金の付いた靴、革やそれに類したもので覆った木製の盾が記述されている。



図2 エドワード黒太子(1330~1376年)のガントレット

騎兵隊にとっては馬具が重要な装備品であった。古代ギリシャでは革製鞍が使用されており、またシベリアのパジリク古墳(前6～前3世紀)からは革製鞍が出土しており、イラン系のスキュティア人は革製の馬衣や鞍を使用していた(前6～前3世紀)。中国でも兵馬俑から革製鞍や胸懸(頸鞅)が使用されていたことが分かる(筆者2009.3検分)。ローマでは4世紀までは中国で用いられたような詰め物をした鞍は見られないが、その後移入された。鞍を固定する腹帯、鐙をつける力革、面繫や尻繫等にも革が使用されていた。ヨーロッパの鞍は中国や中央アジアのものが発達したもので基本的に革製である。中世の鞍はたいてい革製であり、図3はアップリケのある革を真鍮鉾で留めて装飾した雌鹿革製のものである³⁾。明治以降日本に輸入されたいわゆる西洋鞍は革製であった。ちなみに日本古来の鞍は5世紀頃中国で革製鞍に代わって流行した木製の鞍橋に革製の鞍褥や鞆、革で縁取りした屨脊を取り付けたもので、当時のものが正倉院に保存されている。その後、武士社会となる時代では、権威の象徴として華美な練革張鞍や革包鞍が製作された。

これらの軍装備には途方も無い大量の革



図3 中世の鹿革製鞍

が必要であり、軍隊の規模増大が中世における皮革生産の増加をもたらしたと考えられる。

3. 手袋・靴・上着

16世紀中頃の職人の木版画に、袋物屋や靴屋、革細工師があり(図4)、それぞれに「鹿革、羊革、子牛革。あらゆる種類の手袋と財布。貴婦人や農婦、修道士の袋物」、「婦人や騎士の長靴と短靴。銃や弓の袋。貯蔵用や水用の袋。箱の被い」、「牛、豚、鹿、羊の革。ベルト」の語を含む詩が付いている⁶⁾。これらの絵や文が当時すでにいろいろな革製品が一般的に広く使用されていたことを物語っている。

手袋の最古の遺物として、古代エジプトのツタンカーメン王の麻製のものが挙げられるが、他の遺跡からは革製の赤い手袋も発見されている³⁾。8世紀にはカール大帝は宮廷で革手袋を使用しており、手袋が権力者の象徴的な意味を有していた⁷⁾。その後、支配者から領主や騎士への象徴的な贈り物となった。また王の戴冠式の際にも用いられた。カトリック教会ではローマ帝国



図4 靴屋(木版画 1568年)

時代から儀式において手袋は神の祝福の象徴と宗教的権威を意味するものとして使用された。聖職者の手袋の色はミサの挙行の際には白とし、アプト（修道院長）とビショップ（司教）は赤、プレラート（高位聖職者）は紫、プリースター（祭司）は黒と身分によって決められていた。なお日本の古代の宮廷では、革製の履の色が身分によって決められていた。カール大帝は790年頃Sithinの修道院長と修道士に狩猟とその獣皮からの手袋や帯の製造を許可した⁷⁾。817年のアーヘン（ドイツ西部のライン川下流）の宗教会議では、上級聖職者には高価な材質の手袋の使用を許すが、修道士は羊やボック（羊・鹿・山羊等の雄）の革手袋のみの使用を許すことが決められた。

手袋は宗教的な行事において聖職者が使用したが、16世紀以降カトリーヌ・ド・メディシス王妃（1519～89 フランス王アンリII世の妃）やスコットランド女王メアリー・スチュアート（1542～87）が装飾品として身に付けたことから女性にも流行した。イギリスのエリザベスI世（1533

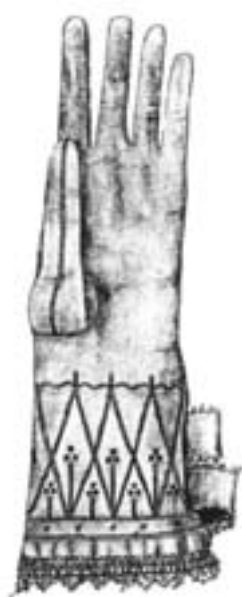


図5 エリザベスI世（1533～1603年）の手袋

～1603)の愛用した手袋は革製で刺繍が施され、さらに絹の裏を付けた豪華なものであった(図5)⁷⁾。ヘンリーVIII世(1491～1547)は鷹狩りに用いた装飾した鹿革のものを使用しており、また農民や市民も作業用に手袋を使用していた^{3,7)}。手袋にはバックスキンや山羊革、コルドバ革が一般的に使用された。

革製の靴やサンダルは原始時代から使用されていた。11、12世紀以降脛当てが知られており、14世紀以降それに足の部分が付き、さらに長靴に発展した。14、15世紀のヨーロッパでは、オリエントに起源を有する爪先の細い反り上がった短靴(嘴状の靴)が流行した。これはゴシック期の尖塔建築に見られる細長いものへの趣向によるものであるが、ついには先端を鎖で足に留めるほどになった。船の舳に似ていることからプーレーヌと称された(図6)^{1,8)}。イギリスではその発祥地であるポーランドのクラクフに因んでクラクフスと称した。この妙に細長い爪先は後に規制あるいは禁止されたので、今度は15、16世紀に幅の広い靴(カモの嘴あるいは牛の口状の靴)が流行した。農民は厚い底と甲を縫い合わせ足首を革紐で縛る靴(ブントシュー)を履いていた。これはドイツから全ヨーロッパに普及し、16世紀初めの農民の闘争や一揆のと



図6 16世紀のプーレーヌ



図7 16世紀初期のブントシュー

き、この靴が旗印になった（図7）¹⁾。

衣類に用いられる革は基本的には軽くて柔軟な山羊や羊、鹿などの革である。バフ革は厚くて丈夫な牛革であり、13世紀頃から防護用の胴着あるいは金属製甲冑の下着に使用された。これらが1500年頃には男子用上着に取り入れられ、チューニックまたはタブレットと称され、17世紀頃まで着用された³⁾。

4. 毛皮

11～13世紀の封建制の習慣として、国王や領主が家臣や部下に贈り物を与えることにより主従関係を緊密にすることがあった。中でも毛皮や毛皮を裏地にした衣類が多かった。高級なリスやクロテン、シロテン、ビーバー、アーミン（オコジョ）などの毛皮はステイタスシンボルであった。古代エジプトでは豹の毛皮がそうであった。これらの毛皮は主にユーラシア大陸北部の森林地帯から集められ、領主の荘園で手工業者（職人）によって加工された。初期十字軍の東方文化との接触により、ヨーロッパの服飾に変化が生じ、毛皮が流行した。チャーサーの14世紀イギリスの説話集「カンタベリー物語」には、「修道士の袖口が灰色の毛皮（領地きっての飛び切り上等の

品）で縁取りしていた。豪商がフランドル（フランダース）製のビーバーの毛皮帽を頭に載せ、しゃれた留め金の付いた長靴（おそらくコルドバ革 筆者）を履いていた。」という記述がある。前述の「中世騎士物語」には、聖霊降臨節の式典後の宴会で司厨長がシロテンの官服を着て1000人もの若い貴族をつれて給仕したと記されている。イギリスのヘンリーⅧ世（1509～47在位）は黒色の毛皮の着用を王族に限定し、クロテンの毛皮を子爵以上の者に限るという命令を発している⁸⁾。毛皮は履物や手袋にも使用された。庶民も毛皮を使用したか、身近な兎や狐、羊等のものであった。森林地帯の毛皮獣は毛皮流行による狩猟の拡大と造船・製鉄業の発展による森林破壊により急減し、16世紀初めには枯渇化した。

5. まとめ

軍隊の増強にともない軍装備品に対する皮革の需要が増大した。甲冑が革製から金属製に移行したが、小札や環は革衣の上に縫い付けられていた。手袋や靴等は軍人や貴族ばかりでなく、農民や市民にも普及した。

文 献

- 1) Bravo, G.A. : "1000000 Jahre Leder Eine Monographie", Birkhauser Verlag, Basel und Stuttgart (1970) P. 223.
- 2) アドルフ・ローゼンベルク：図説 服装歴史上, 図書刊行会 (2001) P. 165.
- 3) Waterer, J.W. : "A History of Technology", The Clarendon press, Oxford (1956) P. 147.
- 4) Deutsches Ledermuseum : "Deutsches Ledermuseum

- angeschlossen Deutsches Schuhmuseum", Graphische Werkstatte, Offenbach (1956) Nr.650.
- 5) サンケイ新聞大阪本社：ヨーロッパ革工芸美術展, (1975) No.19, 44, P. 161.
 - 6) ヨースト・アマン版 ハンス・ザックス詩：西洋職人づくり, 双書美術の泉 11, 11刷, 岩崎美術社 (1986) .
 - 7) J e t t m a r , J . : " D i e Lederhandschuhfabrikation" , Verlag von Bernh. Friedr. Volgt, Leipzig (1915) P. 5, 9, 14.
 - 8) 市田京子：かわとはきもの, No. 156, 皮革技術センター台東支所 (2011) P. 13.
 - 9) 森義信：メルヘンの社会情報学, 近代文芸社 (2006) P. 37.